

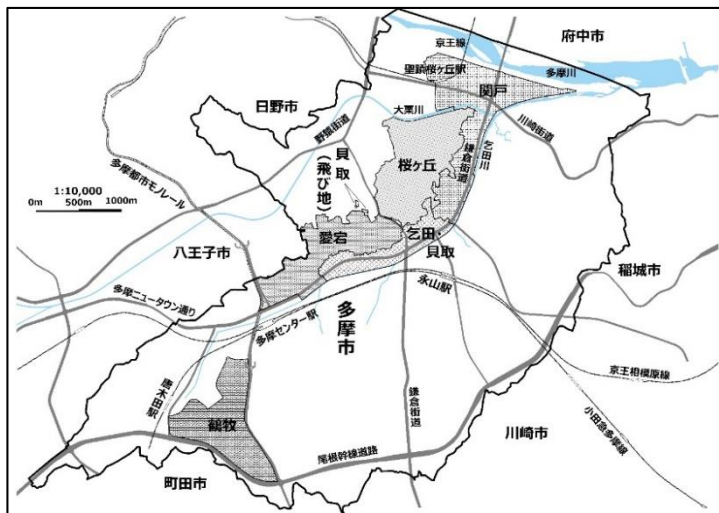
地域への愛着と定住意識 ——多摩市内の5地区の差違に着目して——

立教大学大学院 井上公人

1 目的

本報告では、東京都多摩市の関戸、乞田・貝取、桜ヶ丘、愛宕、鶴牧の5地区に着目し、住民が抱く地域への愛着と定住意識について明らかにする。なお、ここでいう地域への愛着とは、「人々と特定の地域をつなぐ感情的な絆や結びつき」(Hidalgo & Hernández 2001) のことである。

報告者(石田光規ら 2016)は、これら5地区の比較分析から、住民が抱く地域への愛着と定住意識には、居住地区によって顕著な相違があることを明らかにした。従来、郊外は一面的・画一的にとらえられてきたが、これら5地区では異なる開発が行われた結果、地区および住民の特性は顕著に異なっており、このことが影響を与えたと考えられる。本報告ではこれを踏まえ、より精緻な分析を行うことで、住民の愛着と定住意識の関係および、地区ごとのメカニズムの差違を詳細に明らかにしたい。



2 方法・使用するデータ

以下のデータを用いた多変量解析を行う。

- 【調査名称】多摩市のまちづくりと福祉に関する調査
- 【調査主体】大妻女子大学人間関係学部 石田光規研究室
- 【調査方法】郵送調査法 ※発送はクロネコメール便、返送は郵便を用いた
- 【対象者】2013年6月1日時点で、以下の地区に居住する満30歳以上、79歳未満の男女
- 【調査地区】関戸、乞田・貝取、桜ヶ丘、愛宕(東寺方団地・和田団地を含む)、鶴牧(2~6丁目)
- 【計画標本】各調査地区500人 計2,500人
- 【標本抽出】選挙人名簿抄本(2013年6月1日現在)を用いた系統抽出
- 【調査時期】2013年9月
- 【回収数】1,086票(43.4%)

3 結論

地域問題の解決における「コミュニティ」の重要性が再び注目されているが、行政の政策は平等・公平・画一的であり、必ずしもその地区にとって最適な政策が行われるわけではない。しかしながら、今回の分析で明らかになったような地区ごとの差違を考慮に入れた政策が行われない限り、「コミュニティ」を具現化するための活動を行う人々、特に地域住民の負担は大きなものになるだろう。

とりわけ、これまで地域活動を担ってきた人々の高齢化と、活動の次世代への継承が地域的課題になっている現在だからこそ、こうした地域差を考慮に入れた行政のはたらきかけが重要だといえる。

〈文献〉

- Hidalgo, M. C. and B. Hernández, 2001, "Place attachment: Conceptual and empirical questions", *Journal of environmental psychology*, 21: 273-81.
- 石田光規・大槻茂実・脇田彩・井上公人・林浩一郎, 2016, 「たま・まちづくり研究会の概要と研究報告(2)」『都市政策研究』首都大学東京都市教養学部都市政策コース, 10: 13-74.